

# 北陸六味

## 上野 千鶴子さん⑭

# バカヤロー言いたい相手

社会学には「クレイム申し立て」という概念がある。社会問題とは、あらかじめそこにわかりやすいかたちであるものではなく、誰かが「それはおかしい」「問題だ」とクレイムをつけることによって初めて作り出される、という考え方のことだ。世の中には「モンスター・クレイマー」などという呼び方もあって、何かとケチをつける困ったひとのことを指すようだが、クレイムに限らず、自己主張することがこの社会ではきらわれるらしい。

だが、セクシアルハラスメントにしても、ドメスティックバイオレンスにしても、クレイム申し立てをする人がいたからこそ、問題として取り扱われるようになった。ど

ちらもカタカナであるのは偶然ではない。それまでそれぞれ「いたずら」とか「痴語喧嘩」とか呼ばれていたことがらを、人権問題だとクレイム申し立てしたのが外国で、日本はそれを輸入したからだ。それ以来、世の中がぎすぎすしてね、とイヤがる人もいるようだが、救われたひとたち

がどんなに多いことか。「痴漢は犯罪です」という標語を東京の地下鉄のなかで見つけたときの感動といったら！だから、セクハラが増えたかどうかを問うのはあまり意味がない。わかるのはセクハラだと申し立てる人たちが増えた、ということだけだから。そしてそれは女性の人権感覚が鋭敏になってきているということでもある。

めさせるにはたいへんな努力がいる。立命館大学のわたしのゼミには社会人受講生が多いが、そのなかに、過労死遺族会の関係者がいる。彼女も夫の死を受け入れられなくて、過労死認定を求めて闘っ

てきた女性だ。権利はクレイム申し立てをしない限り、向こうから歩いてやってはこない。ゼミでのやりとりのことだ。「クレイム申し立てって……」よくわからない、という彼女に、ゼミの受講生仲間がうむむ、と詰まったあげくにせっぱつまってこう説明した。



イラスト・田中聡美

「つまり……あんたがバカヤローを言いたい相手ってことだよ」  
「それなら言いたい相手はいない。いちばんにバカヤローを言いたいのは、死んだあのひとだよ」  
夫を過労死で失ってから25年経っていた。そのあいだ、自分の

だが、なんで死んだのよ、死ぬほど苦しかったらなんでも言ってくれなかったのよ、死ぬほど働く必要なんてないじゃないのよ……。バカヤローと言いたい思いが鬱積していったらどう、彼女はその一言を25年目にゼミの仲間の前で吐いたのだ。

ゼミは一瞬、厳肅な雰囲気になりました。こういう一言を引き出す、温かさや信頼が仲間のあいだにあった。そして学問の用語を血のかよった道具にする智恵と心意気があった。こういう時だ、教師をやっているよかった、と思えるのは、(社会学者)